高野邦夫句集



目次

序

高野邦夫には、もともと詩人としての一連の優れた実績がある。では、君における句作とは、どのように理解すべきなのだろうか。

詩作は、文学創造の動機・過程のすべてがそうであるように、現実の一事象に触発され駆り立てられ、それをかく在らしめている背後のものに迫ってゆく、君の場合もそのことに変りはあるまい。この場合句作は、こうした営みの持続の果の、ふととり落した事象の断片への執着に過ぎないかも知れない。だがわれわれは、このような断片の中にこそ生命の集約されたもの、宇宙的な拡がりをはらんで息づいているものがあり、それを誤らずすかさず把え得れば、作品に無限の生命感を与え得ることを知っている。句友高野邦夫との交りは、すでに三十年に及んでいるが、その間君を把えて離さなかった作句は、このような成果への予感に因るものだろう。

ところで、作家の歩みを対象との関わり方から見た場合、二つの行き方が考えられよう。一つは、創造の営みの中に己が生ける現実の重みを重みとして曳きずらざるを得ないもの、私はこれを中絶・欠如の痛みに立つわびの詩人と見る。もう一つは、そうした重みを跳躍台として飛躍し、己が一世界を創造し、結果として、そこから現実を照らし出す、いわゆるさびの詩人である。高野邦夫の重い詩感は、より前者に近いと見られよう。そこには年代と共に変化の徴しをはらんできているが、私は、その歩みの中に一書をまとめるに足る作家良心を見るものである。

もともとわが国には、わびとさびの詩感は併立してあった。芭蕉は、わび茶人利休の抵抗の美感とさび歌人西行の円融の詩感とを等しく評価しているが、それはその底に〈まことを責める〉共通の詩精神を見たからだろう。まことに作品は、その作家が本音を生まにうち出す、その誠心の深さによってのみ高次の普遍性が付与される。われわれ同行の歩みはまことに多様であるが、〈まことを責める〉精神において軌を一にしている。高野邦夫は、その一人として最も信頼できる人間であることは、その作品を見て頂ければ判然と

するだろう。

昭和六二年一月

不破　博

多摩丘陵

早春の昏くるる疎そ林りんの光かな

春の雪舞ふや丘陵樹きの声す

麗うららかの多摩水光や羽搏うつ鳥

雉きじ笛ぶえや森は弥やよ生いの集落趾あと*一

春光の疎林熊くま笹ざさ踏み分けし

春光や小学訓導明治の碑*二

春疾風鶏は地を掻かく双肢さうしかな*三

涼しきや鶏ふふみ鳴く縁の下*四

白しら南は風えや草の間かける放ち鶏どり*五

羽抜鶏はぬけどり孤高といふも愚かかな

白しら南は風えや葉裏葉裏の森の息

汗すなり茶昆だびの鉄てつ扉ぴをまのあたり*六

夏蝶や何に憑つかれて森に迷ひ

蒼空さうくうや万緑詩うたを孕はらみゐつ

えご落花清浄しやうじやうと野の仏かな*七

明易あけやすを老醜きざす猫の歩よ*八

昼寝覚魂こん玻は璃りの色に染そみ*九

手折たおりけり丘おか辺べ頰に触ふる花はな芒すすき

今朝けさ秋の森の径みちや瀬の音す

今朝秋の水みづ辺べや石の炊かしぎ跡*一〇

今朝秋の歩ほや林間の沼の色

今朝秋の天や一樹いちじゆの声すなり

今朝秋の山さん容よう心しん気き透とう徹てつす*一一

今朝秋の風や胸毛の濃き男

秋立つや多摩丘陵の一石碑

霊園の籬まがき秋色しうしよく寂びゐしよ*一二

銀杏いちやう落おち葉ば鐘楼の階崩れゐし*一三

地図に無き径みちや風の赤のまま

草の実や輪りん舞ぶ華はなやぐ河川敷*一四

旅果ての日の口くち紅べにや花野雲*一五

風に乗る紙飛行機よ秋の空

秋を聴く橋上けうじやうの歩や多摩の奥

華やぎの声す水辺の夕芒ゆふすすき

秋風や渡と船せん廃せし多摩の岸*一六

乾からびゐで風に息する木の葉かな*一七

木の実落おつ鳥語てうごは冥くらき彼方より*一八

菊花展きくくわてん禰ね宜ぎ白髪を掻かき撫なでつ*一九

郷土史家石仏語る秋うらら*二〇

小鳥来る雲は瑠る璃りの夕翳かげり*二一

晩ばん菊ぎくや羽累かさねたる鶏二三

燦さん爛らんの風ふう樹じゆの濡れや秋の沼*二二

暫しばらくは華やぐ落暉らくき秋の沼*二三

行く秋や声寂び唄うたふ木曽荒あら男を*二四

寒林を声透すき朱唇しゆしん現れしかな*二五

冬朧とうろうの鳥からすは詩を舞ふ多摩丘陵*二六

冬ふゆ木き原ばら根ね株かぶの塊くれの腐くちつも*二七

冬の橋水すい勢せい鈍く煌きらめきつ

疎林はや残照透すけり冬の沼*二八

寒波来るや遠山ゑんざん澄める多摩丘陵

一いち木ぼくの虚こ空くうを寒かん鴉あ遥はるかかな*二九

荒涼の暮景ぼけい寒鴉の数なりし*三〇

鴉からす舞ふ多摩丘陵の二月かな

熊くま笹ざさの尖さき裂さく風の二月かな

枯れ草の風に傾く落暉らくきかな

寒林や闇を孕はらみて北斜面

寒かん禽きんの声す竹ちく林りん透く光*三一

枯かれ原はらやもの音吾われに帰きするのみ

真直ぐなる眼

凛烈りんれつの梅の気配や寺泊り*三二

真ま夜よの花わが蹌さう踉らうを許されよ*三三

都市の魔ま性しやう目覚めし真ま夜よの桜かな

囀さへづりの国くに原はらにをり一礎石*三四

陶器片彩あや美しや春はる渚なぎさ

逝ゆく春の深空みそらよ響く花はな鋏ばさみ*三五

一山いちざんの緑の翳かげや法ほ螺らの音ねす*三六

青年僧りんりん汗の行歩かな*三七

向日葵ひまはりの林りん立りつ過疎の里なりし

夏蝶や日ひ矢や盤ばん石じやくを貫ける*三八

遠き嶺みね白しろ靴ぐつの歩の吾が思郷しきやう*三九

夏なつ木こ立だち沢鳴り雨の気配とす

黒くろ南は風えや老翁らうをう海に何を喚おらぶ*四〇

夕ゆふ凪なぎや吃きつ水すい深く投とう錨べうす*四一

砂に埋もれゐし人の眼まなこや沖の雷らい

焦心の裸身渚なぎさを駈かけ行けり

蛇数匹嬉き嬉きとし川かは面も滑りをり

獣園じうゑんの蛇百態の閑しずけさよ

砂の声すなるあなうら秋の浜*四二

蜑あま二三声す秋光しうくわうの砂防林*四三

秋の海一いち鵜う瞳の厳しさよ

縹渺へうべうの奥おく処がは知らず秋の湖うみ*四四

湖うみ抱いだく里に芋掘る閑けさよ

谿谷けいこくの深潭しんたん秋の声すなり*四五

満まん山ざんの露払ひたり秋の風*四六

満山の紅葉もみぢ明りを歩みけり

木の実降る道極きはまれり水音す*四七

木の実落つ林道太たい虚きよに連つらなれり*四八

秋暮るる禰ね宜ぎが白しら緒をの草ざう履りかな

かかる小さき去来の石の秋すなり*四九

逝ゆく秋の雲や尾垂たるる佐渡の沖*五〇

波止はと刻む逆白波さかしらなみや冬落暉らくき*五一

冬鷗かもめ波間歇あくびの一埠ふ頭とう

氷湖はや昏くるる茜あかねをとどめざる*五二

大枯野一いち木ぼく魑ち魅みが棲処すみかとす*五三

一木の影抽象の冬ふゆ田たかな*五四

一寒村山脈背の二月かな

廃鶏はいけいの二羽相あひ倚よれる寒さかな*五五

寒林の旧祠きうしに至る径こみちかな*五六

四し囲ゐ寒林魂透すいて此こ処こに在らず*五七

大枯野鳥獣息を潜めたり

改札の無人を風の落おち葉ばかな

寒かん灯とう下か教へ子原級留置とす

襟えり立てし外套ぐわいたうの背の鉄てつ扉ぴかな

雪降り積つむ彼ひ岸がん此し岸がんや川一筋*五八

小さき幸せ

春しゆん愁しうや心の襞ひだの淡き影*五九

地図を読む囁ささやき春のシャンデリア*六〇

永日光裡ながひかり博物館を出いでしかな*六一

大正の風ふう貌ばうの座の長閑のどかかな*六二

オパール光こうゆたりとありぬ春の海*六三

白魚や少年が言ふ舟の霊たま*六四

逝く春や望郷の譜ふを屋上をくじやう園ゑん*六五

春昼しゆんちうの神域巫女みこの声すなり*六六

墓裏の閑か春の蚊なりと思ふ

うつらねのうつら目覚めや春の昼*六七

作家などと子は夢みつつ入学す*六八

青年の覇は気き横わう溢いつす夏野かな*六九

風薫かをる湖うみ縹渺へうべうと一沙鷗さおう*七〇

街洗ふ雨よ五月さつきの茶さ房ばうより*七一

恋訥とつと語る教師や花か袋たいの忌き*七二

虹たつや封書の重みポストに聞く

紫陽花あぢさゐの風やボロ猫這はひ出でし

昼寝覚ねざめ海はだらりと窓の外*七三

小鳥葬る上さらさらと竹の秋*七四

蟻の道辿たどり揺れをり幼な髪

夏帽を目ま深ぶかに歓喜童子かな*七五

裸子はだかごや纏まとひしなべて踏みしだき*七六

裸子の天てん真しん砂の眩まぶしさよ*七七

四し股こ踏めば砂噛かむ指や雲の峰*七八

渓谷の潺湲せんかん新樹波うてり*七九

秋立つや風を孕はらみし捕虫網

朝刊のびしよ濡れ開く野の分わきかな*八〇

野分あと夜よは折をり鶴づるを吾あ子ことかな*八一

童謡の自おのづからなる木の実かな

陽光を畳める地図や秋の蝶*八二

庭下駄の歩の二三歩や稲いな妻づます*八三

郵便受の空っぽ風の芙ふ蓉ようかな

思し惟ゐ果てなし野分のあとの海の色*八四

船にをり慕情ぼじやうさ揺らぐ秋の浜

秋暁しうげうの微光雨あま戸どの隙すき間まより*八五

颶風ぐふう一過妻の素肌に光あり*八六

鰯いわし雲ぐも叢林そうりん秋の声すなり*八七

鳥墜おつる湖こ辺へんの華や秋の声*八八

風秋す海ほとりなる花圃くわほの里*八九

冬暉とうき透すく疎林幼稚舎の声すなり*九〇

ざくと断たつ白菜芯の黄ばみをり

大だい根こ抜く地球歪ゆがむとばかりかな*九一

マフラーの颯爽さうそう市いちに魚うを提さげし

冬ふゆ凪なぎの光ゆ現れ来一汽き艇てい*九二

連絡船上蹌踉さうらうとあり寒月光*九三

炎の街

夏帽や砕さい石せきの道街まちとなる

夏シャツの少年の瞳ひとみ真直ますぐなり*九四

校舎裏うら手てに蛇打ちてをり五六人

青年教師総そう身しん汗の怒りかな

ある時の汗の軀く臓ざう腑ふ波うてり*九五

七月の海鳴りやまず砂走る*九六

メーデーや風の記憶を老闘士*九七

歩道橋脚下きやくか熱風ありにけり

石油コンビナート金属ただに灼やくるかな*九八

夏草や焦砂せうさを捲まける海の風*九九

都市港湾海南風なんぷうの焦砂かな

炎昼えんちうの臨港地帯運河死す*百

炎昼や寂じやくとし白き石油基地*百一

伐折羅ばさら神将しんしやう炎昼の天極めたり*百二

カンナ燃ゆる機関区に来て貨車徐行

油ゆ槽さう群立河口満ち来る葉は月づき汐しほ*百三

秋行くと眼め路ぢ遙はるかなり歩道橋*百四

廃艇の銹さび鉄塊てつくわいや秋の海

銹び止めの朱あけ鉄柱や冬の雲

朽船きうせんに鳥とり影かげのあり波止はとの冬*百五

遠富士とほふじや風枯荻からおぎの埋立地*百六

海光かいくわうのいつぱい枯草の埋立地

廃はい屋をくや歩めばなべて冬の音*百七

冬帽子目ま深ぶか卑陋ひろうの性しやうたりし*百八

外套ぐわいたうの風の広場に至るかな

冬の街青年の異い装さう濶歩かつぽせり*百九

石油缶錆さびひしやげある路地の冬*一一〇

病める日々

欝うつなれば眼まなこ尖とがりし余よ寒かんかな*一一一

違ゐ和わの座の余寒や壁のデスマスク*一一二

杖つゑの歩の肩の尖りの余寒かな

亡母ははに縋すがる魂たまの微光や春の夢

早春やひたすらに思ふ歩まねば*一一三

鳥雲てううんに風にしばたく病者の眼め*一一四

春寒や妻にす埒らちもなき鋭声とごゑ*一一五

朧おぼろとも無む明みやうの炎えんとも死の歩ほとも*一一六

花冷はなびえの夜よるや呻唸うなりの一病者*一一七

若わか葉ば光こう仰ぐ疼とう痛つうを意識しつ*一一八

扇風器刻々虚無を掠かすめつつ*一一九

籐とう寝ね椅い子す夢は吾が屍しを風に晒さらし*一二〇

秋の雷らい寝返れば骨きしきしと

病めば黙もくす光の世界秋の蝶

遠稲妻とほいなづま亡母の影に死を問ひつ*一二一

整形外科内科と病やみて秋長たけし*一二二

病褥びやうじよくの眼めや秋麗しうれいの大おぼ玻は璃り戸ど*一二三

秋果しうくわ油彩描きさしの儘まま入院す*一二四

短たん日じつや目覚むればはや暮るる空*一二五

寡くわ黙もくなる医師よ師し走はすの夜よの回診

寒玻は璃りの空よ医師言ふ血糖値*一二六

湯婆たんぽ抱いて尿意を耐ゆる真闇まやみかな*一二七

便器乞こふ拡声器音冬の夜*一二八

寒かん月げつや魂たま抉えぐりたるメスなりしか*一二九

病室へ妻凩こがらしを負おひて来し*一三〇

小こ春はる日びや蹣まん跚さんの歩ほの一病者*一三一

薄氷や途上危ふき病者の眼*一三二

詩の坩堝

麗うららかの詩のほしい儘まま天降あまくだり来よ

春しゆん暁げうの雲間花神くわしんの息すなり*一三三

囀さへづりや広告の裏に綴りし詩*一三四

梅見行情思じやうし自づと詩の坩堝るつぼ*一三五

詩は炎なり探梅たんばい果てし夕べの歩*一三六

春寒し〆しめ切りの稿かう定まらず*一三七

麗うららかや陶土にあてる竹の箆へら

詩の壺を野に置きてみよ四月馬鹿*一三八

花に思ふ音楽河畔暮れ初そめし*一三九

梨の花ゆらめきの炎のかの子の碑ひ*一四〇

藤の花朗らう誦しよう源氏物語*一四一

画廊幾つ銀座は今し遅ち日じつ光*一四二

画布奔はしる筆ひつ端たんそそけ麦の秋*一四三

梅雨つゆの窓油彩破は調てうのリズムかな*一四四

奔ほん放ぱうの油彩万ばん緑りよく閑しずかなり*一四五

冷房の画廊詩想の閑ひまありし

水墨画展語る爽さう秋しうの丘の家*一四六

金亀子こがねむし一いつ閃せん闇の奥よりす

白しら南は風えや読み継ぐ戦中作家の記

夜の蜘蛛くも校正洩もれし一語かな*一四七

破棄の稿積みしを歩あゆむ夜の蟻あり

明易あけやすや詩は縹渺へうべうの海と空

吾われ亦も紅かう信しな濃の路ぢなれば故こ旧きうの詩*一四八

竹光る朔さく太た郎らう忌きや雨催ひ*一四九

真ま夜よ出しゆつ帆ぱん風を額ひたひに四し迷めいの忌き*一五〇

芙ふ美み子こ忌や白日に濡れ小埠ふ頭とう*一五一

河かつ童ぱ忌きや読みさしのまま同人誌*一五二

詩を醸かもす甕かめ欲し月は天てん心しんに*一五三

翻訳詩明治を醸す葡萄かな*一五四

秋の沼猟れふ歩ほの黙の思し惟ゆい様々*一五五

旅果ての雲よーいち路ろの秋す声

天てつ辺ぺんの風ゆ天降あまくだり来秋の蝶*一五六

秋の原素描そべうが摑つかむ一老樹

良りやう寛くわんの里さと辺べや書家と秋しう思しの歩*一五七

詩は鳥と無む辺へんを遊ぶ花野はなのかな*一五八

キャンパスの想白しら菊ぎくを光とす

老酒の酔ひ蹌さう踉らうと白秋忌*一五九

漱そう石せき忌憔せう悴すいの歩の胃の痛み*一六〇

咳こめば糸断たち切れし詩想かな

韓国の詩人の眉び宇うや冬の街*一六一

詩が穿うがつ胸外套ぐわいたうの襟えり立てし*一六二

死刑囚の手記読むや雨冬ふゆ隣どなり*一六三

寒林に一人を晒さらす杜と詩し読みつ*一六四

眠る山鳥獣の詩うた蔵ざうしたり

枯木山山歌さんか野唱やしやうの声すなり*一六五

冬ふゆ夕ゆふ焼やけ詩は幻想の巨きよ樹じゆたりし

詩の坩堝るつぼたり一望の大枯野

夢に見し吾わが屍し雪嶺せつれい浄きよかりし*一六六

冬の夜の卓たく上じやう詩あり玻は璃りの壺

寒灯下詩の凛りん々りんを綴つづるかな*一六七

吾が詩編あまむ氷湖を染むる夕ゆふ茜あかね*一六八

後記

昭和三二年、偶然のことから故八木九鬼先生の知遇を得て渋柿に入会した。九鬼先生の最晩年、私が二九歳の時である。九鬼先生没後は不破博先生に師事。その間、故野村喜舟先生、徳永山冬子先生の誌上選を戴いた。振返って思えば、いずれの先生方に対しても不肖の弟子であったが、ともかく今日まで牛歩の歩みを貫くことが出来たのは一ひと重えに諸先生方の御指導の賜物である。

今回句集上じよう梓しにあたっては不破先生より懇切な序言まで戴いた。記して感謝申しあげるとともに、今日までの先生の直接の御指導を無にすることのないよう一層の精進をお誓いする次第である。

昭和六二年一月一五日

高野　邦夫

補記

　本書は一九八七年（昭和六二）に、芸風書院から刊行された『高野邦夫句集』を原本にし、俳句に詳しくない読者向けに、ふりがなと多数の注を加えたものである。本来、俳句は原文のままで読まれるべきものだが、季語など俳句特有の語や、漢籍に用いられる古語など多数含むため、現代人に理解しやすいように配慮した。
　なお、俳句のふりがなは、句に合わせて歴史的仮名遣いにした。原本には簡潔な略歴が加えられているが、著者の甥で私の従兄である故・山川清秀氏の作成した年譜に加筆したものを巻末に添えることにする。

　二〇一九年六月二十五日

高野敦志

略年譜

昭和三年五月十三日　川崎市南河原（現、幸区南幸町）に生まれる。父勝吉かつきち。母こと。三男。
昭和十九年三月　神奈川県立神奈川工業学校三年を修了。（十五歳）
昭和十九年四月　海軍甲種飛行予科練習生として奈良海軍航空隊に入隊
昭和二十年　終戦　復員
昭和二十一年　日産重工業株式会社入社
昭和二十二年　日産重工業青年学校入学
昭和二十三年三月　青年学校卒業、日産重工業退社
昭和二十三年四月　日本大学高等師範部国語科入学
昭和二十六年三月　同学卒業
昭和二十六年四月　川崎市立中学校教諭となる。この年以降、市内の臨港中学や西中原中学で国語を教える。
昭和三十七年二月　第一詩集『寒菊』（五月出版）発表
昭和三十七年四月　小泉孝子と結婚
昭和四十年四月　川崎市立工業高等学校定時制の教諭となる。
昭和四十四年二月　雑誌『鷹』第一号発刊
昭和五十二年十一月　雑誌『鷹』第二十号
昭和五十三年七月　詩集『氷湖』（昭森社）
昭和五十四年　雑誌『鷹』第二十七号発行、以降廃刊。
昭和五十五年一月　詩集『燦爛の天』（昭森社）
昭和五十五年八月　出版記念会、化膿性股関節炎発病。以降入退院を繰り返す。
昭和五十七年九月　詩集『定時制高校』（昭森社）
昭和五十八年三月　詩集『川崎』（昭森社）
昭和五十九年四月　詩集『修羅』（昭森社）
昭和六十年四月　詩集『彫刻』（昭森社）
昭和六十年十二月　詩集『曠野』（芸風書院）

昭和六十一年七月　詩集『銀猫』（昭森社）
昭和六十二年四月　句集『高野邦夫句集』（芸風書院）
昭和六十二年十二月　詩集『日常』（昭森社）
平成元年十二月　詩集「川崎（ラ・シテ・イデアル）」（教育企画出版）
平成三年七月　詩集『短日』（吟遊社）
平成五年一月　詩集『峡谷』（吟遊社）
平成六年九月　詩集『鷹』（吟遊社）
平成七年八月　詩集『敗亡記』（吟遊社）
平成九年四月十四日　敗血症により、横浜市青葉区の昭和医大藤が丘病院で他界（行年六十八歳）。四十九日の法要の後、川崎市宮前区の初香山本ほん遠のん寺じに埋葬。法名は「至徳院法教日邦信士」
平成十年四月　詩集『廃園』（遺作）（吟遊社）

*一 「雉笛」とはキジを呼び寄せるための笛。

*二 「訓導」とは、教え導くこと。

*三　疾風は「しっぷう」「はやて」と読める。双肢は「そうし」と読むが、俳句のふりがなは句に合わせて、歴史的仮名遣いで表記する。

*四 「ふふみ鳴く」とは古語の「ふふむ」（膨らむ）と「鳴く」でできた複合動詞。

*五 「白南風」とは梅雨の終わり頃から吹く南風のこと。

*六 著者の母ことの死を悼いたんで詠んだと思われる。

*七 「えご」とはエゴノキのことで、その種は有毒である。「清浄」は邪念のないこと。

*八 「明易」とは夜の明けるのが早い夏げ至し前後の夜のこと。

*九「玻璃」とは水晶、またはガラスのこと。「染む」は「染まる」を表す文章語。

*一〇 「炊ぐ」とは米や麦を「炊たく」ことを表す古語。

*一一「山容」とは山の姿。「透徹」とは澄み切っていること。

*一二 「籬」とは竹や柴を編んだ垣根のこと。

*一三　　「鐘楼」は「しょうろう」または「しゅろう」と読む。「階」は「かい」または「きざはし」と読む。階段のこと。

*一四 「華やぐ」とははなやかになること。

*一五　「野」は本来、変体仮名の「の」で表記すべきところだが、ここでは漢字「野」で代用する。

*一六　多摩川にはかつて多くの渡しがあったが、ここでは昭和四〇年代まで残っていた丸子の渡しか菅すげの渡しを指すものと思われる。

*一七 「乾ぶ」とは乾燥して水分がなくなること。

*一八 「鳥語」は「ちょうご」と読み、鳥の声のことをいう。

*一九 「禰宜」とは神社の神職のこと。「つ」は完了を表す助動詞。

*二〇 「うらら」とは空がよく晴れてのどかな様子。

*二一 「瑠璃」とはるり色のことで、紫がかった濃い青。

*二二　「燦爛」とはまばゆいさまを表す。ちなみに、著者には『燦爛の天』という詩集がある。

*二三 「落暉」とは落日、夕日のこと。現代仮名遣いでは「らっき」と読む。

*二四 「荒男」はここでは「あらおとこ」ではなく、「あらお」と読む。荒々しく猛々たけだけしい男。

*二五 「朱唇」とは口紅をつけた赤いくちびるのこと。

*二六 「冬朧」は「とうろう」と読ませるのか。冬の薄曇り。

*二七　「塊」は「くれ」と読ますのか。かたまりのこと。「腐ちつも」で「朽ちてしまっても」という意味。

*二八 「はや」とは「早くも」という意味。

*二九 「寒鴉」とは冬のカラスのこと。

*三〇 「暮景」とは夕暮れの景色。冬のカラスが群れをなす荒涼としたさまを詠んだ。

*三一 「寒禽」とは冬の鳥のこと。

*三二　「凛烈」とは寒さが身にしみるさま。「寺泊り」で佐渡の寺泊に泊まっていることを表す。

*三三 「蹌踉」は「そうろう」と読む。足もとがよろめくさま。

*三四 「国原」とは広々とした平原のこと。

*三五 「深空」とはまっ青な空のこと。

*三六 「法螺の音す」で、修験者が吹く法螺貝の音が響くさまを表す。

*三七　　「りんりん」とは「凜々」と書き、男性的でりりしいさまを表す。「行歩」は「ぎょうぶ」または「こうほ」と読む。歩くこと。

*三八 「日矢」とは雲間から射し入る光のこと。「盤石」とは大きな岩のこと。

*三九　著者は太平洋戦争末期に予科練に志願した。入隊していた頃の思いを描いているのか。

*四〇　「黒南風」とは梅雨の頃に吹く南風のこと。「喚ぶ」とは大声で叫ぶことを表す古語。

*四一　「夕凪」とは海風から陸風に変わるとき、一時的に風がやむこと。「吃水」とは水上の船が水に沈んでいる部分の長さ。

*四二　「あなうら」とは足裏を表す古語。砂の上を歩いて鳴る足音を、砂の声にたとえている。

*四三 「蜑」とは海に潜って貝や海藻をとる女。海女。

*四四 「縹渺」とはかすかで、どこまで広がっているか分からないさま。

*四五　「谿谷」とは川の流れる深い谷。渓谷。「深潭」は深い淵ふちのこと。「秋の声」は鹿の鳴き声か。「奥山に 紅葉踏みわけ 鳴く鹿の 声きく時ぞ 秋は悲しき」（猿丸大夫）

*四六 「満山」とは山全体のこと。

*四七 「極まる」とはその先がないところまで来たということ。

*四八 「太虚」とは大空、虚こ空くうのこと。また、古代中国の宇宙観で、陰陽の生じる大本のこと。

*四九　「かかる」とはこのようなという意味。「去来」とは行ったり来たりすること。俳人の向井去来の名を踏まえた発ほっ句くか。

*五〇 「垂る」は「垂れる」の古語。

*五一　「波止」とは海中に延びる防波堤のこと。「逆白波」とは水の流れに逆らって立つ白波のこと。「落暉」は落日、夕日のこと。

*五二　著者には『氷湖』という詩集がある。「昏る」とは暮れるの古語。「茜」はあかね色、紫がかった赤色。

*五三 「魑魅」とは山林に宿る精霊。

*五四 「抽象」とは対象から性質や共通性を抜き出すこと。

*五五　「廃鶏」とは卵を余り産まなくなって、食肉にされる運命の鶏。二羽が自ずと身を寄せ合う寒さや心細さを詠んでいる。

*五六 「旧祠」とは神仏を祀まつる古い祠ほこら。

*五七　人けのない冬の山林で、自分自身さえ消えてしまいそうな荒涼とした風景を詠んでいる。

*五八　「降り積む」とは「降り積もる」の古語。「彼岸」は向こう岸、「此岸」はこちら岸のこと。

*五九 「春愁」とは春に感じる物憂い気持ち。または、青春期の感傷的な思い。

*六〇　春の野で地図を片手にハイキングする人々のささやきを、春のまばゆい光にたとえているのだろう。

*六一　「永日光裡」で「ながひかり」と読ませるのか。「日が長くなって明るいうちに」という意味。

*六二 大正デモクラシーの頃に育った人々は、心穏やかだったことを表現しているのか。

*六三　オパールは乳白色の地に赤や緑の輝きがある宝石。「ゆたりとありぬ」は「ゆったりとあった」という意味。宮城道雄に「春の海」という箏曲がある。
*六四 少年が白魚を「船ふね霊だま」、船の守護神にたとえたことを取り上げた。
*六五 卒業が近づく頃、屋上から故郷を思う歌声が聞こえるさまを詠んでいる。
*六六 「春昼」とは、日が長くなった春の昼間のこと。
*六七　うつらうつら寝て、目覚めても意識がぼんやりしているさまを、のどかな春の日と重ねている。
*六八 作家になりたいと言って、早稲田大学第一文学部に入学した息子のことを詠んだ。
*六九 「横溢」とはあふれ出ること。
*七〇 果てしなく広がる湖と、砂上のカモメを対比させている。
*七一 茶房とは喫茶店のこと。
*七二　　「訥」とはどもってなめらかに話せないこと。訥とつ弁べん。田山花袋には『蒲団』『田舎教師』などの小説がある。五月一三日の命日は、「花袋忌」と呼ばれる。
*七三　　本来は昼寝から目覚めた本人が「だらりと」しているところを、窓の外に見える「海」に投影している。海がゆるやかにうねる「のたり」を、「だらり」で言い換えている。
*七四　「葬る」は「はぶる」または「ほうむる」と読む。「はぶる」は「ほうむる」の古語。
*七五 「歓喜」は「かんき」または「かんぎ」と読む。「かんぎ」は仏教での読み方。
*七六　「纏ひし」はまとっていた物のこと。衣服。「なべて」はすべてということ。「踏みしだく」は踏んで滅茶苦茶にすること。
*七七 「天真」とは自然のままで飾り気がないこと。
*七八　「四股」とは力士が左右交互に足を高く上げて踏み下ろす動作。この場合の指は足の指。
*七九　「潺湲」とは水がさらさらと流れるさまを表す。「うてり」は「打っている」ということ。
*八〇 「野分」とは秋から冬にかけて吹く強い風。台風。
*八一　「吾子」は古くは「あご」、のちに「あこ」と読むようになった。ここでは著者の娘のこと。
*八二 秋の蝶を、陽光をたたんだ地図にたとえているところが面白い。
*八三 「稲妻」とは雷の光、雷光のこと。
*八四 「思惟」は「しい」、または「しゆい」と読む。思考すること。
*八五 「秋暁」とは秋の明け方のこと。
*八六 「颶風」とは秋に吹く暴風のこと。
*八七　「鰯雲」とは秋によく見られるうろこ状の雲。「叢林」とは樹木がしげっているところ。
*八八 「鳥墜つ」は狩猟の光景を表している。
*八九 「花圃」とは花畑のこと。
*九〇　「冬暉」は冬の光、冬の太陽。「疎林」とあるが、落葉して林はよりまばらに見える。
*九一　「大根」をここでは「だいこ」と読む。小林一茶の句「大根引き大根で道を教へけり」から着想したものか。
*九二　「冬凪」は冬のしけの合間に海がないでいること。「ゆ」は「より」を意味する古

語。
*九三 「蹌踉」とは足がふらつくこと。
*九四 「真直ぐ」はまっすぐなこと。
*九五 「軀」は肉体、「臟腑」は内臓を表す。
*九六 「海鳴り」とは海から聞こえてくる雷のような音。波やうねりが海岸で崩れるときに出す音。
*九七 「風の」でどこからともなく伝わってくるという意味を表す。 「メーデー」とは五月一日に開かれる労働者の祭典。
*九八 「ただに」はじかに、すぐにという意味。
*九九 「焦砂」は焼けるように熱くなった砂。「捲ける」は巻き上げるという意味。
*百 「炎昼」とは真夏の焼けるような昼下がりのこと。
*百一 「寂」とは人の姿が見えない様子。
*百二 伐折羅神将は仏教の十二神将の一つで、忿ふん怒ぬの姿を示す。
*百三 「葉月」とは陰暦八月のこと。「汐」は潮、海水。
*百四 「眼路」とは見通せる範囲、視界。秋になると、空気が澄んで遠くまで見渡せる。
*百五 「鳥影」とは鳥が飛ぶ影。「波止」は防波堤のこと。
*百六 「枯荻」とは枯れた荻のこと。
*百七 「なべて」とはすべて、一面にといった意味。
*百八 「卑陋」とは品性が卑しいこと。「性」は「しょう」「さが」と読めるが、ここでは形容動詞のタリ活用なので「しょう」と読む。本性や性分のこと。
*百九 「異装」とは変わった服装のこと。濶歩とは大またに悠々と歩くこと。
*一一〇 「ひしゃげる」とは、押されてつぶれたさまを表す。
*一一一 「余寒」とは立春が過ぎたあとの寒さ。
*一一二 デスマスクは、死者の顔から型を取って作った石膏の面。
*一一三 著者は糖尿病を病み、健康のために長時間散歩をしていた。
*一一四 「鳥雲」は「ちょううん」と読み、小鳥が多数群れて雲のように見えるさまを表す。
*一一五 「春寒」は「しゅんかん」または「はるさむ」と読む。「埒もない」はつまらない、たわいないという意味。「鋭声」は怒鳴りつける声。
*一一六 「朧」とはぼんやりかすんでいるさま。「無明」とは仏教でいう根本的な無知。
*一一七 「花冷え」とは、桜の咲くころ急に気温が下がること。
*一一八 「疼痛」とはずきずきする痛み。
*一一九 「掠める」はここでは、触れそうで触れずに通り過ぎる。かする。
*一二〇 「籐」は熱帯性のツル草で、乾燥させて家具などを作る。「屍」とはしかばね、死体のこと。
*一二一 「亡母」には「ぼうぼ」「ぼうも」「もうぼ」といった読み方がある。
*一二二 著者は糖尿病、慢性肝炎のほか、股関節炎などを病んでいた。「長けし」とは長いこと。
*一二三 「病褥」とは病床、「秋麗」とは秋の日のよく晴れてのどかなさま、「玻璃」とはガラスのこと。ここでは、入院生活で病室の窓から見えた秋空と、ガラスで隔てられた思いを詠んでいる。
*一二四「病褥」とは病床、「秋麗」とは秋の日のよく晴れてのどかなさま、「玻璃」とはガラスのこと。ここでは、入院生活で病室の窓から見えた秋空と、ガラスで隔てられた

思いを詠んでいる。
*一二五　「短日」とは日の短い冬の日のこと。入院生活で目が覚めると、早くも日が暮れつつあったさまを詠んだ。なお、著者には『短日』という詩集がある。
*一二六 糖尿病では、血糖値が病状の進行を示す目安となっている。
*一二七 「湯婆」とは湯を入れて足を温める容器。
*一二八 ここでいう「拡声器」とは、ベットの枕元にあるナースコールのこと。
*一二九　「寒月」とは冬の月のこと。ここでは冬の三日月を手術に用いるメスにたとえている。
*一三〇 「凩」は「木枯らし」とも書き、冬の初めに吹く冷たい風のこと。
*一三一　　「小春日」とは冬の初めの暖かい日のこと。「蹣跚」はよろめきながら歩くさま。
*一三二　「薄氷」は「はくひょう」「うすらい」などと読む。路上にはった薄氷がよく見えず、転びそうであやうい状況を詠んでいる。
*一三三 「花神」とは花の精、花をつかさどる神のこと。
*一三四　かつて、新聞の折り込み広告の多くが裏は白紙だった。個人商店が広告を入れることは、昭和時代まではよくあった。
*一三五　「情思」とは心の思い。「坩堝」とは金属を溶かすのに用いる耐熱性の容器。ここでは多くの物が入り交じったところ。
*一三六 「探梅」とは、詩作や句作のために梅を見ること。観梅。
*一三七 「稿定まらず」とは、推敲が終わらず、未定稿のままの状態。
*一三八　「四月馬鹿」は「エープリル・フール」の直訳。四月一日は嘘をついてもいい日と言われる。
*一三九 花と言えば、桜のことである。滝廉太郎の「花」から連想したものか。
*一四〇 小説家岡本かの子は、神奈川県橘樹たちばな高津村（現在の川崎市高津区）二ふた子この地主の家に生まれた。耽たん美び的な作風で知られる。かの子の文学碑は、実家に近い二子神社の境内にある。夫は漫画家の岡本一平、長男は画家の岡本太郎である。
*一四一 紫式部の『源氏物語』では、光源氏の藤壺に対する禁断の恋が語られる。
*一四二　「遅日」とは日暮れの遅い春の日のこと。著者は遠縁である画家、中西新太郎と親交があり、個展が開かれた銀座の画廊に足を運んでいる。
*一四三　著者は油絵も描いており、画布の上を走る絵筆の毛羽立つさまを、麦の秋である初夏、収穫を控えた麦の穂になぞらえている。
*一四四　「破調」とは調子の整わないこと。窓に打ちつける梅雨の雨を、調子の外れたリズムの油絵になぞらえている。

*一四五 「万緑」とは見渡す限り緑であるさま。
*一四六 「爽秋」は「そうしゅう」と読む。さわやかな秋のこと。
*一四七 夜、原稿用紙の上をクモがはっているさまを、誤植の文字になぞらえている。
*一四八　　「吾亦紅」とは夏の終わりに暗紅色の花をつけるバラ科の多年草。「故旧」とは、むかしなじみであること。
*一四九　萩原朔太郎は大正・昭和の詩人。朔太郎忌は、朔太郎の命日である五月一一日。「竹」は詩集『月に吠える』所収。「雨催い」は「あまもよい」または「あめもよい」と読み、雨が降りそうな空模様を表す。
*一五〇　二葉亭四迷は明治時代の小説家。言文一致の小説『浮雲』や、ツルゲーネフの翻訳で知られる。ロシアから帰国する途中、ベンガル湾の船上で病死した。五月一〇日が命日。
*一五一　林芙美子は昭和時代の小説家。代表作は『放浪記』。命日は六月二八日。桜島には林芙美子の文学碑が建っている。「花のいのちはみじかくて 苦しきことのみ多かりき」とある。
*一五二　「河童忌」は芥川龍之介の命日である七月二四日。「ぼんやりした不安」という言葉を残して自殺。『河童』は代表作の一つ。
*一五三　小林一茶の「名月をとつてくれろと泣く子かな」から発想したのか。「天心」とは空の真ん中。
*一五四 明治時代の翻訳詩集としては、上田敏の『海潮音』が有名。
*一五五　　「猟歩」は「りょうほ」と読む。獲物を探して歩き回ること。「思惟」は「しい」とも読む。深く考えること。
*一五六 「ゆ」は奈良時代に用いられた助詞で、「から」「より」の意味。
*一五七 良寛は江戸時代後期の歌人、禅僧。越(えち)後(ご)の出(い)雲(ずも)崎(ざき)の生まれ。
*一五八 「無辺」とは果てしがないこと。
*一五九　「老酒」は中国語で「ラオチュー」と読む。「蹌踉」は「そうろう」と読む。足もとがふらつくこと。白秋忌は詩人、北原白秋の命日で、一一月二日。
*一六〇　明治・大正の小説家夏目漱石は、神経衰弱と胃潰瘍で苦しんだ。漱石忌は、漱石の命日である一二月九日。
*一六一　「眉宇」とは「まゆのあたり」を指す。「憂いを眉宇に漂わす」「眉宇に漂う決意」などの表現がある。朝鮮独立や韓国の体制批判で、獄につながれた韓国の詩人への思いを表している。
*一六二 「穿つ」とは穴をあけること。
*一六三　死刑囚とは反体制詩人で、朴正熙（パク・チョンヒ）政権下で死刑判決を受けた金芝河（キム・ジハ）の手記のことか。
*一六四 「杜詩」とは、唐の詩人杜(と)甫(ほ)の詩。
*一六五 「山歌」とは田舎でうたわれる歌。山野で働く者がうたう歌。
*一六六 「屍」は死体、しかばね。「雪嶺」とは雪をいただく山のこと。
*一六七 「凜々」とは心身が引き締まるさま。勇ましい様子。
*一六八　「茜」は染料に用いる野草。根から暗赤色の染料が取れる。ここでは紫がかった赤い夕空を表している。